

チノ語の疑問文末に現れる3つの助詞について

林 範 彦

(日本学術振興会特別研究員)

キーワード：チベット・ビルマ諸語，真偽疑問文，疑問語疑問文，名詞述語，
動詞述語

0. はじめに*

日本語をはじめとする東・東南アジアの諸言語には，以下のように疑問を表す標識を文末に用いて，疑問文を形成する言語が多い。(1)に日本語，(2)¹⁾にビルマ語，(3)に漢語普通話の例を示す。

- (1) a. あなたは香港に行ったことがありますか？
b. 誰があのケーキを食べましたか？

* 本稿は日本言語学会第130回大会(国際基督教大学)での口頭発表「チノ語の疑問助詞について」の内容に加筆・修正を加えたものである。質疑応答の場で有益なコメントを下された風間伸次郎，白井聡子，張麟声の各先生に感謝したい。更に本稿の草稿に関して様々な形でコメントをいただいた諸先生および友人の皆さんに謝意を表したい。特に，上野善道，菊池康人，熊本裕，庄垣内正弘，西村義樹，林徹の各先生，および稲垣和也，児島康宏，笹原健，高橋美季，永澤済の各氏，加えて本稿の査読を担当された2名の査読者からは重要な指摘を多く寄せていただいた。この場を借りて深謝したい。もちろん，本稿におけるすべての誤謬は筆者に帰する。また，本稿で取り扱ったデータは筆者が2003年から2006年にかけて行った中国雲南省景洪市での調査に基づいている。作例および自然発話データを主に提供していただいたチノ族の王阿珍(1980年生，女性)と玉納(1950年ごろ生，女性)の各氏には心からの感謝を表したい。なお，2003年および2005年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の援助を，2004年夏の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシジョン語の解説—」(研究代表者 長野泰彦)の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げる。

1) ビルマ語(口語体)の例はOkell(1969)より引用したが，そのローマ字表記は筆者の方式に改変している。‘T’は舌端を歯茎全体に幅広く押し当てて破裂させる音を，‘ä’は一般には[a]を表す。声調表記についてはOkell(1969)の方式を採用し，‘ˊ’で下降調を，‘ˋ’で高平調を表す。

(2) a. yá-Tǎ-là?

できる-REAL-Q

「うまく行きましたか？」(Okell 1969: 198)

b. bǎTu pyò-Tǎ-lè?

誰 話す-REAL-Q

「誰が(そう)言いましたか？」(Okell 1969: 198)

(3) a. nǐ shì Rìběnrén ma?

2SG COP 日本人 Q

「あなたは日本人ですか？」

b. shéi lái le?

誰 来る ASP

「誰が来たのですか？」

(1) ~ (3) の例はすべて疑問文である。(3b)を除く例の疑問文末に見られる助詞をここでは「疑問文末助詞」としておこう²⁾。(1a, 2a, 3a)は真偽疑問(Yes-No 疑問),(1b, 2b, 3b)は疑問語疑問(Wh 疑問)である。一般に疑問文末助詞を用いる東・東南アジア諸語は、真偽疑問/疑問語疑問といった疑問の種類に関わらず同一の文末助詞を用いるタイプと、それぞれの疑問に応じて異なる形式を用いるタイプに大きく分かれる。上に挙げた例を見ると、日本語は前者のタイプに、ビルマ語や漢語³⁾は後者のタイプに属すると考えられる。

中国雲南省景洪市で話されるチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支の1言語

2) 日本語の「か」は「誰かが来た」や「何か食べたい」のように文末に置かれず、不定名詞を表す場合もある。このことから「か」は疑問文末助詞ではなく、「不確定を表す助詞」とまとめる考え方もあろう。しかし、本稿では疑問文末に置かれる「か」のみに注目している。よって、言語類型論的には日本語の「か」は他の言語における「疑問文末助詞」に対応すると考えてよいだろう。

なお、世界の諸言語における疑問文のタイプとその表現手法に関しては Sadock and Zwicky (1985) 等を参照されたい。

3) (3b)は疑問文末助詞が用いられていない。この場合も真偽疑問と異なる手法(ゼロ形式)を用いているとここでは考える。

上記以外でも漢語では「呢 ne」「啊 a」が疑問文末に用いられることがある。呂(1980)では「呢 ne」は真偽疑問以外の疑問文で用いられ、「啊 a」は条件はあるものの、真偽疑問/疑問語疑問のいずれにも用いられると述べている。

であるチノ語悠楽方言⁴⁾の疑問文末を見ると、表面的には $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$ といった、主に3つの文末助詞が見られる⁵⁾。

- 4) チノ語は中国雲南省景洪市に主に居住するチノ族の話す言語である。2000年の人口統計によるとチノ族の人口は中国全土では20,899人である。そのうち景洪市には19,250人が暮らしている。しかし、実際にチノ語を流暢に話せる人口は不明である。チノ族は周辺諸民族に比して母語の保有率は高いと考えられるが、すでに漢語雲南方言しか話せないチノ族も少なくない。チノ語の話者総人口は多く見積もって1万数千人程度にとどまると考えられる。

チノ語は大きく悠楽方言と補遠方言の2つに分かれる。話者人口の約9割が悠楽方言を話すとされる(蓋1986)。

以下に、筆者の分析によるチノ語悠楽方言の音素目録を示す。

[チノ語悠楽方言の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音]/p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, tɕ, tɕh; m, ɱ, n, ŋ, ɲ, ɲ, ŋ, ɳ; l, l̥; f, v, s, z, ʃ, ʃ, ʒ, x, v; (w)/[母音]/i, e, ø, ε, œ, a, ə, ɔ, y, o, u/である。声調素は/55, 44, 33, 35, 42/である。音節構造は頭子音+介音+主母音+末子音/声調で構成される。またチノ語ではm, ɱ, n, ŋが成節鼻音(syllabic nasal)となりうる。

なお、本文中で同じ形態素ながら調値が相互に異なることがある。これらは環境によって声調が交替する場合である。その場合、本文中で引用する際、声調を表記しない場合がある。

更に、チノ語文法の言語類型論の特徴としては以下のとおりである。基本語順はSOVで、形容詞は名詞の後ろから修飾し、関係節は名詞の前から修飾する。チノ語は膠着性の高い言語であり、動詞が述部となる際、動詞語根を中心に多くの接尾辞類・接頭辞類が付加しうる動詞複合形式(verbal complex)を構成する。

以上、音韻ならびにチノ語文法全体に関する概要については林(2006)を参照されたい。本稿で用いる略号は次のとおりである。ASP: アスペクト, BEN: 受益, CL: 類別詞, COMP: 補文標識, COP: コピュラ, EXP: 経験, FUT: 未来, NEG: 否定辞, NML: 名詞化, NOM: 主格, OBL: 斜格, OBLIG: 義務/許可, PL: 複数, PART: 助詞, PAST: 過去, PFT: 完了, PROG: 進行, PROH: 禁止, POSS: 所有格, Q: 疑問, REAL: 叙実法, REL: 関係節標識, SFP: 文終止助詞, SG: 単数, 自分(3): 3人称に呼応する再帰代名詞。

また、‘⁴’はその前後が非自立形態素であることを、‘=’はその前後が自立形態素であることを示す。

後置詞は非自立的要素と見なしうが、チノ語文法においては倚辞(clitic)の位置を占めるため、‘=’の記号を用いて表す。チノ語における主な後置詞は以下のとおりである。

=⁴⁴(話題), =⁴⁴(所有者), =^{va55}~=^{a55}(場所, 方向, 対格, 与格), =^{la55}(手段, 道具), =^{jo44}(並列, 奪格), =^{jo44}(同等比較), =^{the44}(共格), =^{lɛ44}(列挙)。

- 5) 正確にはほかに $-jo^{44}$, $=e^{44}$ も見られる。

i) $kha^{55}e^{44} no^{33}=pho^{33}-lo^{33} \eta u^{55}=e^{55}-jo^{44}?$

なぜ また = 翻る-ように COP=POSS-Q

「どうして(欧州とここでは昼と夜が) ひっくり返っているんだらう?」

ii) $a^{55}xo^{44}mi^{55}=la^{55} pu^{33} tsho^{55}=e^{44}?$

漢語 = で シャべる = POSS

「(お前は彼女と) 漢語でしゃべるの?」

$-jo^{44}$ は i) に見るように、多くは自問するとき用いられる。多くは「~ということなぜなのだろう」という意味合いが込められている。真偽疑問文・疑問語疑問文の両方に現れることができる。また $=e^{44}$ は ii) に見るように、元来は所有格を表す後置詞であり、文末に用いられた際は動詞複合形式を名詞化する機能を持つ。真偽疑問文・疑問語疑問文の両方に現れることができるが、平叙文に現れることも多く、疑問文であると

以下の例を見られたい。

- (4) a. khv⁴² to³³tho³⁵=to⁴⁴=lo⁴²-la⁴²/ *-na⁴²/ *-a⁴⁴?
 3SG.NOM 起きる=出る=来る-Q
 「彼は起きましたか？」
- b. kho³³su⁵⁵ to³³tho³⁵=to⁴⁴=lo⁴²*-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?
 誰 起きる=出る=来る-Q
 「誰が起きましたか？」

(4) を見ると、(4a) は真偽疑問文、(4b) は疑問語疑問文である。このデータから見ると、真偽疑問文では -la⁴²、疑問語疑問文では -na⁴² が疑問文末助詞として選択されていると分かる。そしていずれの疑問文でも -a⁴⁴ は用いられない。この条件を一旦まとめ、「仮説 A」と呼んでおこう。

仮説 A：真偽疑問文では -la⁴²、疑問語疑問文では -na⁴² を文末に置く。

しかし、一方で仮説 A に違反する例もある。

- (5) lo⁵⁵=no³⁵-a⁴⁴*-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?
 転ぶ=痛い-PFT-Q
 「転んで痛いの？」
- (6) ci⁴⁴ kho³³su⁵⁵ *-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 これ 誰 -Q
 「これは誰ですか？」
- (7) kho³³su⁵⁵ t[uanj³³=no³⁵-my⁴²-Ø/ *-la⁴²/ *-na⁴²/ *-a⁴⁴?
 誰 轆く=痛む-PAST-Q
 「誰が轆かれて痛かったの？」

の認定はほぼ文脈によっていると考えられる。

-jo⁴⁴ は -la⁴²、-na⁴²、-a⁴⁴ とは違って、自問の意味合いが強く、=e⁴⁴ は単に動詞複合形式の名詞化機能を持つのみであると考えられるため、これらは本稿の考察の対象からはずしておく。

(8) a⁵⁵mo⁴⁴ a⁵⁵me⁵⁵ tso⁵⁵-ko⁴⁴-la⁴²/-na⁴²/*-a⁴⁴?

母 ご飯 食べる-PROG-Q

「お母さんはご飯を食べているの？」

上記の例は以下の点で仮説 A に違反している。(5) は真偽疑問文であるが、-la⁴²ではなく、-na⁴²のみが生起している。(6) は疑問語疑問文であるが、-na⁴²ではなく、-a⁴⁴が生起している。(7) は疑問語疑問文であるが、いずれの疑問文末助詞も用いられない。(8) は真偽疑問文であるが、-la⁴²/-na⁴²の両方が生起可能である。このように一見すると複雑な様相を呈している。

先行研究である蓋 (1986, 1987) では、上記の疑問文末助詞に対応する助詞についてその存在を記述してはいるものの、明確な生起条件については何ら述べていない。

本稿は筆者の現地調査から得た資料をもとにチノ語悠楽方言の直接疑問文における疑問文末助詞の生起条件に関する記述を行う⁶⁾。結論としては、真偽疑問文／疑問語疑問文という基準のほかに、名詞述語／動詞述語という形式的な基準が疑問文末助詞の生起に関わっていることを示す。更に、チノ語において疑問文末助詞は単純に真偽疑問／疑問語疑問といった区別を表すのではなく、焦点の範囲を表す役割を果たしていることも述べる。

続いて、本稿の構成について述べる。まず、1で先行研究である蓋 (1986) の記述をまとめ、その問題点を指摘する。次に、2で、チノ語の疑問文末に現れる3つの助詞、-la⁴²、-na⁴²、-a⁴⁴についてそれぞれが出現する事例を検討する。この節では上記の3つの助詞に加えて、助詞を一切用いない場合についても検討する。更に、3では真偽疑問・疑問語疑問のいずれにも用いられる-na⁴²について意味・機能的側面から検討する。その結果、-na⁴²は文の一部に焦点が当たる場合に用いられることが分かる。最後に4で、結論を述べ、チノ語のこれらの助詞の歴史的由来について若干の考察を加えて、本稿をまとめる。

なお、本稿では「回答を要求する文」のみを分析対象とし、それを「疑問文」

6) チノ語の間接疑問文においては疑問文末助詞が文中に現れないことが多い。詳細は別稿に譲りたい。

と認定する。よって、本稿では反語文は取り扱わない。反語文は形式上、一般の疑問文と共通しているが、「回答を要求しない」という点で、疑問文と見なすことができない。

また、本稿では「話し手」「聞き手」という用語を用いている。「話し手」は「質問を発する側」であることを、「聞き手」は「質問を寄せられた側（回答を要求された側）」であることを指す。この点に注意されたい。

1. 先行研究—蓋（1986, 1987）—

上述したように、チノ語の記述における先行研究に蓋（1986, 1987）がある。蓋（1986）はチノ語文法の全体像について概説しており、蓋（1987）はチノ語のモダリティーについてまとめている。蓋（1987）の疑問に関する項目は蓋（1986）の内容とほぼ変わりが無い。むしろ蓋（1986）のほうが各助詞に関する項目でも疑問について取り扱っている分、詳しいと言える。ここでは本稿と関係する疑問を表す助詞について、蓋（1986）の記述をまとめておきたい。

まず、蓋（1986: 117-119）では疑問文を、「是非問句（真偽疑問文に相当）」「特指問句（疑問語疑問文に相当）」「選択問句（選択疑問文に相当）」「反復問句（動詞の肯定形式と否定形式を並べて問う疑問文）」「反詰問句（反語文に相当）」の5種類に分類している。本稿では主に真偽疑問文と疑問語疑問文について扱う⁷⁾。反語文は扱わないことにしているため、ここでは引用しない。

以下、それぞれのタイプの文について簡潔に例⁸⁾と概要をまとめる⁹⁾。

7) 選択疑問文については3.3で言及する。

8) 蓋（1986）と筆者の資料では微細な点で異なる。蓋（1986）は主にチノ語悠楽方言のバト下位方言を記述しており、筆者の資料であるバカー下位方言と語彙や表現法においてやや異なる（蓋1987は筆者の調査地点と同じ「バカー下位方言をもとにしている」と述べているが、やはり筆者の分析とは異なる）。更に蓋（1986）の音韻分析と筆者のものとは若干の点で異なる。（9）から（13）までの例は蓋（1986）の表記法をそのまま引用している（グロスに関しては筆者が若干改変している）ため、筆者のものと異なる点（声調において軽声を認めるなど）も少なくないことを断っておく。また、蓋（1986）では一部、グロスを与えていないところもあるが、その場合は筆者において解釈を施さず、そのまま引用した。

9) 蓋（1986）ではそれぞれの文のタイプの箇所でも動詞の声調交替について言及している。しかし、本題に本質的に関わる問題ではないので、以下の引用では省略する。

〔是非問句〕

文末に la^{42} 「嗎」, na^{44} 「呢, 嗎」を加える¹⁰⁾.

- (9) ce^{33} y^{33} $lo^{44}mu^{33}$ thi^{44} ma^{44} $ŋə^{44}$ ε $la^{42}?$

これ 関連助詞¹¹⁾ 豹 1 CL COP Q

「これは豹か？」(蓋 1986: 117, 太字による強調は筆者)

(9) 以外にも例を挙げているが, na^{44} が用いられている例は疑問文の箇所では提示されていない. 文末助詞を扱っているところで以下の例を挙げている¹²⁾.

- (10) $khə^{42}$ $me^{42}mi^{44}$ $khə^{42}$ tu^{44} a $na^{44}?$

3sG 砂仁 植える Q

「彼は砂仁(アモーム)を植えたか？」(蓋 1986: 74, 太字による強調は筆者)

〔特指問句〕

$khə^{33}su^{44}$ 「誰」, $khə^{44}$ 「何」などの疑問代名詞を用いて表す疑問文で, 語気助詞¹³⁾として ε^{44} 「呢」を置いてもよい.

- (11) na^{42} $khə^{44}$ $ŋə^{33}$ no^{44} lo^{44} $\varepsilon^{44}?$

2sG 何 時 帰る 来る Q

「あなたはいつ帰ってくるの？」(蓋 1986: 117, 太字による強調は筆者)

〔選択問句〕

「それとも」を表す $ku^{55}khə^{42}vu^{42}le^{33}$ を文中に置き, 文末には la^{42} 「呢」を置く.

10) 各助詞の後の鍵カッコ内は蓋 (1986) が与えている漢語訳である.

11) 「関連助詞」は蓋 (1986) で用いられている用語である. 蓋 (1986: 71) によれば, 文中において語句と語句を結びつける機能があり, y^{33} (あるいは le^{33}), mja^{33} , $xə^{44}o^{33}$ がそれに当たるといふ. 蓋 (1986: 71) では「 y^{33} は主語と述語を結びつけるのに用いられる」と述べている. 蓋 (1986) の資料の y^{33} は筆者の資料の ε^{44} に相当すると考えられる. 筆者は注 4 の後置詞の説明で述べたように, ε^{44} は「主語と述語を結びつけるもの」ではなく, 「話題」を標示する機能があると考えている.

12) (10) の $tu^{44}a$ に対して蓋 (1986) ではグロスを与えていない.

13) 「語気助詞」とは漢語の用語で「主に文のモダリティを表す助詞」を指す.

(12) nə⁴² co⁴²svŋ³³ la⁴², ku⁵⁵khæ⁴²vu⁴²læ³³ lo⁴²si³³ la⁴²?

2SG 学生 Q それとも 先生 Q

「あなたは学生ですか、それとも先生ですか?」(蓋 1986: 118, 太字による強調は筆者)

[反復問句]

肯定形式と否定形式を並べる¹⁴⁾.

(13) nə⁴² fo⁴⁴pə⁴² le³³ e la⁴² mo⁴⁴ le³³ e la⁴²?

2SG 狩猟 行く Q NEG 行く Q

「あなたは狩りに行くのですか、行かないのですか?」(蓋 1986: 118, 太字による強調は筆者)

蓋(1986)の記述をまとめると以下のとおりである。助詞の観点からすると、la⁴²は真偽疑問文と選択疑問文に現れ、na⁴⁴は真偽疑問文に現れる。またe⁴⁴は疑問語疑問文に現れてもよい。la⁴²とna⁴⁴はそれぞれのもつ意味によって使い分けられていると考えられている。

しかし、これには問題がある。蓋(1986)の記述している、la⁴²が筆者の資料の-la⁴²に、na⁴⁴が筆者の資料の-na⁴²に対応するとしたら、-na⁴²が疑問語疑問文に現れる例を蓋(1986)は説明できていない。また、la⁴²とna⁴⁴が厳密な意味的基準で使い分けられているという説明も特になされておらず、その生起する条件も不明である。更に、筆者の資料の-a⁴⁴に相当する助詞の記述が蓋(1986)ではなされていない。

以下では蓋(1986)で明確に示されなかった疑問文末に現れる助詞の生起する条件を解明していきたい。

2. 疑問文末助詞から見た形式的な生起条件

0では、疑問文のタイプから仮説Aを立てて、疑問文末助詞の生起条件を考

14) ここでは「肯定形式と否定形式を並べる」としたが、漢語普通話のような形式(注30を参照)ではなく、肯定形式・否定形式ともに末尾に疑問文末助詞を置いていることに注意されたい。

えた。しかし、そのために(5)～(8)のように仮説Aに反する例が説明できなかった。

本節では疑問文末助詞がいかなるタイプの疑問文にあらわれることができるのかを形式的に見ていく。すなわち、 $-la^{42}$ 、 $-na^{42}$ 、 $-a^{44}$ の3つの助詞の生起する疑問文の条件を記述していく。あわせて、疑問文末助詞が生起しない条件も考察する。

2.1 $-la^{42}$ の生起条件

まず、 $-la^{42}$ が生起する疑問文について見ていこう。

- (14) a. khv^{42} $to^{33}tho^{35}=to^{44}=lo^{42}$ - $la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 3SG.NOM. 起きる=出る=来る-O
 「彼は起きましたか？」 (=4a)
- b. $nə^{42}$ $ja^{55}ŋi^{44}$ ma^{33} - no^{55} - $pho^{33}=lo^{42}$ - $la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 2SG.NOM 今日 NEG-また-翻る=来る-O
 「あなたは今日は帰ってこないの？」
- (15) a. $çi^{44}$ $çi^{44}=e^{55}$ $khjo^{33}tshv^{55}$ jen^{44} - $la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 これ これ=POSS 60 元 O
 「これは60元もするのか？」
- b. $thi^{33}t(ho^{35}a^{33}mjo^{55})$ $-la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 同じ 年 O
 「(彼らは) 同い年か？」

(14)、(15)の例を見ると、 $-la^{42}$ は真偽疑問文に現れることができる。(14)のように助詞の直前が動詞述語¹⁵⁾である場合も、(15)のように助詞の直前が名詞述語¹⁶⁾である場合も $-la^{42}$ の生起は可能である。

一方で、(16)のような疑問語疑問文では現れない。

15) 述部が動詞であり、名詞化接辞などがついていない述語のこと。

16) 述部が名詞あるいは形容詞である文、もしくは動詞に名詞化接辞などがついていない述語のこと。

- (16) nə⁴² ɲu⁵⁵kvi⁴⁴ m^{33*}-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

2SG.NOM 何 要る -Q

「あなたは何が要るの？」

このことから以下のような条件が導き出せるだろう。

■生起条件 A : -la⁴² は真偽疑問文に生起できる¹⁷⁾。

2.2 -na⁴² の生起条件

次に, -na⁴² の生起条件を見ていく。結論から言えば, -na⁴² は真偽疑問文, 疑問語疑問文の両方に現れる。

2.2.1 真偽疑問文

-na⁴² も真偽疑問文で現れることがある。(17) を見てみよう。

- (17) a. a⁵⁵ko⁴⁴ phi⁵⁵=so³⁵ -a^{44*}-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

ドア 閉める = 終わる -PFT-Q

「ドアはもう閉めたの？」

- b. khv⁴² nə³⁵ a⁵⁵me⁵⁵ nø³⁵-a^{44*}-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

3SG.NOM 2SG.OBL 名前 忘れる -PFT-Q

「彼はあなたの名前を忘れたのか？」

(17) の例はいずれも真偽疑問文である。しかし, これには条件がある。-na⁴² の直前は完了を表す助詞 -a が生起している。

更に, 次の対比からもこの条件が明らかになる。

- (18) a. e⁴²? ɲə⁴² ɕi⁴⁴ si⁵⁵tchiŋ⁴⁴ the³⁵-mv³⁵-a^{55*}-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

あれ? 1SG.NOM これ こと 伝える -PAST-PFT-Q

「あれ? 私は (あなたに) このことをすでに言いましたっけ？」

17) この条件は完全に正確とまではいえない。以下の例 (17) で見るとように -la⁴² が真偽疑問文でも生起できない場合がある。

b. e⁴²? ŋɔ⁴² ɕi⁴⁴ si⁵⁵tchiŋ⁴⁴ the³⁵-mɤ³⁵-la⁴²/ *-na⁴²/ *-a⁴⁴?

あれ? 1SG.NOM これ こと 伝える-PAST-O

「あれ? 私は (あなたに) このことを言いましたっけ?」

(18a) と (18b) は実際にはかなり微妙な意味の違いしかない。(18a) は発話時点よりもかなり前に「このこと」が聞き手に対して伝わっているか否かを問うのに対し、(18b) では過去に「このこと」が聞き手に伝わったか否かが問われている。(18a) は完了態であるが、(18b) は単に過去を表している。

疑問文末助詞に目を向ければ、(18a) は完了助詞 -a の直後に疑問文末助詞が後接している。このときは -na⁴² のみが生起しうる。一方、(18b) は過去を表す接尾辞 -mɤ の直後に疑問文末助詞が後接している。このときは -la⁴² のみが生起しうる。

このことから以下のような条件を立てることができるだろう。

■生起条件 B : -na⁴² は真偽疑問文で、完了助詞 -a の直後に生起できる。

しかし、形式的には完了助詞 -a の直後に限らず、以下のような真偽疑問文でも -na⁴² は生起できる。

(19) a. a⁵⁵mɔ⁴⁴ ji³³tʃho⁵⁵ tshi⁵⁵-kɔ⁴⁴-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

母 水 洗う-PROG-O

「お母さんは水浴びしているの?」

b. nɔ⁴² mi⁵⁵tso⁵⁵ a⁵⁵to⁵⁵ m³³-la⁴²/ -na⁴²/ *-a⁴⁴?

2SG.NOM 薪 短い 要る-O

「君は短い薪が要るのか?」

(19) では -la⁴²、-na⁴² の両方が生起可能である。それぞれが用いられた場合、若干の意味的な差異が生まれるが、それについては 3 で後述する。形式的側面だけに注目すると、いずれの例も -na⁴² の直前は動詞述語である。(17) の例を見ると完了助詞 -a が現れるのは基本的に動詞述語であると考えられるため、上述した生起条件 B とあわせると、以下のような条件が立てられよう。

■**生起条件 C** : $-na^{42}$ は真偽疑問文で動詞述語の直後に生起できる。

2.2.2 疑問語疑問文

次に $-na^{42}$ が疑問語疑問文で現れる場合を見ておく。

- (20) a. $kh\text{ɔ}^{33}su^{55}to^{33}th\text{ɔ}^{35}=to^{44}=l\text{ɔ}^{42}*-\mathbf{la}^{42}/-\mathbf{na}^{42}/*-\mathbf{a}^{44}?$

誰 起きる=出る=来る-Q

「誰が起きましたか？」 (=4b)

- b. $n\text{ə}^{42} \eta u^{55}kvi^{44}m^{33}*-\mathbf{la}^{42}/-\mathbf{na}^{42}/*-\mathbf{a}^{44}?$

2SG.NOM 何 要る-Q

「あなたは何が要るの？」 (=16)

(20) を見ると、 $-na^{42}$ は疑問語疑問文に生起できることが分かる。更に詳細に見れば、 $-na^{42}$ に先行するのはいずれも動詞述語である。2.3 以下で後述するように、 $-na^{42}$ は名詞述語の直後に現れることができない。

このことから以下のような条件が立てられるであろう。

■**生起条件 D** : $-na^{42}$ は疑問語疑問文で、動詞述語の直後に生起できる。

2.3 $-a^{44}$ の生起条件

続いて、 $-a^{44}$ を選択する場合について見ておく。

2.3.1 名詞述語

(21) を見てみよう。

- (21) a. $ni^{55}ju^{44}t\text{so}^{33}=j\text{ɔ}^{55}t\text{ci}\eta^{33}x\text{on}^{44}le^{44}-m\text{y}^{44}\eta u^{55}pu^{44}ko\eta^{33}li^{33}$

2PL 家=から 景洪 行く-NML どのくらい キロメートル

$*-\mathbf{la}^{42}/*-\mathbf{na}^{42}/-\mathbf{a}^{44}?$

-Q

「あなたの家から景洪に行くには何キロメートルありますか？」

- b. u⁵⁵sə⁵⁵ nə³⁵ tjeŋ³⁵xua³⁵ ta³³-ŋə³³-mɤ³⁵ khə³³su⁵⁵
 たった今 2SG.OBL 電話 かける-BEN-NML 誰
 *-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 -Q
 「たった今あなたに電話をかけてきたのは誰ですか？」

これらの例はいずれも疑問語疑問文である。しかし -na⁴² が用いられていない。それは疑問文末助詞の前に置かれている述語が大きく関係しているからである。(21a) では、ŋu⁵⁵pu⁴⁴koŋ³³li³³ 「何キロメートル」、(21b) では、khə³³su⁵⁵ 「誰」という名詞が疑問文末助詞の前に置かれている。疑問文末助詞の直前は名詞述語であると認定できる。よって、このことから以下のように条件を立てることができらる。

■生起条件 E : -a⁴⁴ は疑問語疑問文で、名詞述語の直後に生起できる。

2.3.2 時制接辞

時制接辞が疑問文末助詞に先行している場合も共起制限がある。チノ語には過去を表す時制接辞 -mɤ と未来を表す時制接辞 -me がある¹⁸⁾。それぞれについて見ていきたい。

2.3.2.1 過去を表す時制接辞 -mɤ

(22) を見てみよう。

- (22) a. nə⁴² khun³³miŋ³³ ŋu⁵⁵mə⁴⁴ le³⁵-mɤ⁴² *-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 2SG.NOM 昆明 いつ 行く-PAST-Q
 「あなたはいつ昆明に行ったの？」

18) 本稿では時制接辞 -mɤ と -me に対して、声調の表記を行わない。これらは疑問文末助詞などとは異なり、声調交替に富んでおり、基底の声調を与えることが現時点では難しいためである。

また査読者の1人から、本稿で時制標識とした -mɤ および -me を叙法 (mood/mode) の接辞と考えない理由は何か、との質問を受けた。確かに、ビルマ語などのように -mɤ が叙実法 (realis)、-me が叙想法 (irrealis) を表している可能性もあろう。しかし、現時点ではこの問題に深く入らず、本稿では時制標識としてこれらをまとめておく。チノ語のテンス・アスペクトの問題については別稿に譲りたい。

b. nə⁴² ji⁵⁵ŋi⁴⁴ kai³³tsi³⁵ ŋu⁵⁵kvi⁴⁴ lu⁵⁵ ju⁴⁴-mɿ⁵⁵ *-la⁴²/ *-ŋa⁴²/ -a⁴⁴?

2SG.NOM 昨日 市場 何 すべて 買う-PAST-Q

「あなたは昨日市場で何を買ったの？」

これらの例はいずれも過去に行われたことを尋ねている。述部には過去を表す接尾辞 -mɿ が用いられている。よってこれだけのデータからでは、「-a⁴⁴ は疑問語疑問文で、過去を表す接尾辞 -mɿ の直後に生起しうる」という条件が立てられそうである。しかし、この -mɿ は名詞化接辞としての機能も持つことにも注意しなければならない。

以下の例を見てみよう。

(23) khɿ⁴⁴ ten⁵⁵tvŋ⁴⁴ prɔ⁵⁵-kɔ⁴⁴-mɿ⁴⁴ a⁵⁵san³⁵ ɕa⁵⁵tu⁴⁴ ŋu³³-noe⁴⁴.

あの 電灯 明るい-PROG-NML アサン.OBL 部屋 COP-SFP

「あの電灯がついているのはアサンの部屋だ。」

(23) における -mɿ は過去を表していない。‘prɔ⁵⁵-kɔ⁴⁴-mɿ⁴⁴’ で「ついているもの」という名詞句を形成している。すなわち、名詞化接辞としての機能がある。

このことは文末で現れる -mɿ の過去を表す用法にも適用できると考えられる。すなわち、(22) で見た過去を表す -mɿ も形式的には動詞複合形式全体を名詞化する機能を持っていると考える¹⁹⁾。このように考えれば、(22) の例も生起条件 E の一例として含めることができる。

2.3.2.2 未来を表す時制接辞 -me

次に未来を表す接辞 -me について見ていこう。

(24) a. nə⁴² ŋɔ³⁵ phru³³ tse³⁵-mjə⁴²,

2SG.NOM 1SG.OBL お金 借りる-して

khao⁴² phɔ⁴⁴-me⁴²*-la⁴²/ *-ŋa⁴²/ -a⁴⁴?

何 買う-FUT-Q

19) -mɿ は表面的には「補文化」「関係節化」「名詞化」「過去」の用法があると考えられる。このように同一の言語形式が多くの用法を担うことは漢語などをはじめ、多くの東・東南アジア諸語で見られる。詳細については林（印刷中）を参照されたい。

「あなたは私からお金を借りて、何を買うの？」

b. $\eta u^{55}=j\alpha^{44}$ $sa^{42}-me^{42*}-la^{42}/ *-\eta a^{42}/-a^{44}?$

どこ=から 語る-FUT-Q

「どこから語ろうか？」

(24) の例はいずれも -mv の例と同じく、-a⁴⁴ のみが生起しうる。この場合も「-a⁴⁴ は疑問語疑問文で、未来を表す接尾辞 -me の直後に生起しうる」という条件を立ててはならない。この -me も -mv の場合と同じく、名詞化の機能がある。それは -me が後接した節は直後に常にコピュラ ηu^{55} を置くことができる。コピュラの前に来る節は基本的に名詞句である²⁰⁾。

(25) $l\alpha^{55}$ $pa^{55}kha^{42}$ $f\eta u^{55}=le^{42}-me^{44}$ $\eta u^{33}-me^{35}$.

あそこ パカー 引く=行く-FUT COP-PAST

「もしあなたが帰ってしまわなかったら)あのパカー(村名)に(あなたを)連れて行く予定だったのよ。」

(25) の -me の直後にコピュラ ηu^{55} ²¹⁾ が現れている。

更に、-me が後接した節は (26) のように補文標識としても用いられる後置詞 =e⁴⁴ を持たなくても補文になりうる。一方、通常の動詞は補文になる際、(27) のように、補文標識である -mv もしくは後置詞 =e⁴⁴ を節末に置かねばならない。

(26) $a^{55}xua^{44}$ $a^{55}\eta\alpha^{55}$ [$e^{33}-me^{55}$] $\eta\eta^{33}-mv^{42}$.

アホア 自分(3)行く-FUT 言う-PAST

「アホア自身は『行く』と言った。」

20) 確かに、未来接辞 -me はコピュラ ηu^{55} を直後にいつでも置くことができる。しかし、「コピュラ ηu^{55} の前に置かれている」からといって、それが名詞性を帯びているというにはやや根拠として弱いかもしれない。自然発話において、特定のモダリティが関与したり、接続助詞 -xo⁴²「～なら」が共起するときは ηu^{55} の直前の要素が形式的には動詞ではないかと思われる例も散見されるからである。

コピュラ ηu^{55} の直前は圧倒的に名詞性要素である。それはコピュラが元来「AはBである」という等位文構成に用いられることから当然と言えよう。しかし、コピュラ ηu^{55} はその直前位置が焦点であることを示すように機能拡張されはじめているとも考えられ、場合によっては非常にわずかではあるが、動詞が直前に来ることもある、と解釈できる。このようなコピュラの機能についての問題は別稿で論じたい。

21) この例では33調に変調している。

- (27) a. $\eta\alpha^{42}$ [a⁵⁵pu⁴⁴ jə⁴⁴-m⁵⁵] $\text{kh}\emptyset^{44}$ -n α^{44} .
 1SG.NOM 父 叱る-COMP 恐れる-SFP
 「私は父が私を叱るのではないかと恐れている。」
- b. a⁵⁵xua⁴⁴ [tho⁵⁵-le⁴⁴]=e⁴⁴ m³³-m⁵⁵.
 アホア PROH-行く=POSS 言う-PAST
 「(私は) アホアに『行くな』と言った。」

以上により、未来接辞は動詞複合形式を形式的には名詞化する機能をもつことが分かる。

よってこの未来接辞の事例も生起条件 E の一例に含めることができる。

2.3.3 義務・許可を表すモダリティーの接尾辞 -jo

義務・許可を表すモダリティーの接尾辞 -jo についても類似の議論が成立する。以下の例を検討してみたい。

- (28) a. $n\alpha^{42}$ $\eta\text{w}^{55}\text{m}\alpha^{44}$ $\text{z}\alpha^{33}$ -jo^{55*}-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 2SG.NOM いつ 歩く-OBLIG-Q
 「あなたはいつ行かねばならないの？」
- b. $\eta\alpha^{42}$ la⁵⁵pu⁴⁴ tshi⁵⁵- ηu^{55} -n α^{44} , ηw^{42} tshi⁵⁵-jo^{55*}-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 1SG.NOM 手 洗う-～したい-SFP どこ 洗う-OBLIG-Q
 「私は先に手を洗いたいんだけど、どこで洗ったらいいの？」

(28) もいずれも疑問文末助詞として -a⁴⁴ のみが生起しうる。この場合も「-a⁴⁴ は疑問語疑問文で、義務・許可を表すモダリティーの接尾辞 -jo の直後に生起しうる」という個別的な条件を立ててはならない。この -jo も意味は異なるが、「名詞化接辞」としての機能を持っていると考えられる。

以下の例を参照されたい。

- (29) ts α^{55} -jo⁵⁵ 「食べ物」, t[ə⁵⁵-jo⁵⁵ 「日, 日長」
 食べる-NML 生きる-NML

(29)の例を見ると、-joがいずれも動詞を名詞化している。このことを「義務・許可を表すモダリティー」の接尾辞である-joにも敷衍できる。すなわち、「義務・許可を表すモダリティー」の接尾辞-joにも名詞化機能があると考えられる²²⁾。これで個別的な条件を立てることなく、(28)も生起条件Eの一例として含めることができる。

2.4 いかなる疑問文末助詞も生起しない場合：-Øの生起条件

これまででは何らかの音形をもつ助詞が生起する条件を検討した。しかし、わざわざかではあるが、いかなる疑問文末助詞も生起しないという例も存在する。言い換えれば、-Øの助詞が生起するという例が存在する。以下では具体的に2つの事例について見ていきたい²³⁾。すなわち、「論理的な主語が「誰」という疑問代名詞で、かつ名詞述語が文末に置かれる場合」と「述語が疑問語となる場合」である。

22) 更に未来接辞-meの場合と同様、コンピュータŋw⁵⁵の直前にも現れうる。

23) 実際にはこのほかに疑問文末助詞が生起しない場合がある。「なぜ」という疑問副詞が文中にあるときである。

- i) a. n⁴² ŋw⁵⁵lo⁴⁴ŋw⁵⁵vu⁵⁵ ma³³-no⁵⁵-pho⁴⁴=lo³⁵-Ø?
2SG.NOM なぜ NEG-また-翻る=来る-O
b. n⁴² ŋw⁵⁵lo⁴⁴ŋw⁵⁵vu⁵⁵ ma³³-no⁵⁵-pho⁴⁴=lo^{42*}-na⁴²/ *-a⁴⁴?
2SG.NOM なぜ NEG-また-翻る=来る-O
「お前はどのようにして帰ってこないんだ？」

(ia)および(ib)に実質的な意味の差異はない。(ia)では疑問文末助詞が生起しておらず、容認されるが、(ib)では疑問語疑問文で現れるべき-na⁴²、-a⁴⁴の2つともが容認されない。

しかし、疑問副詞「なぜ」が現れれば必ず疑問文末助詞が生起しないとはまでは言えない。以下のような例も多く見られるからである。

- ii) khv⁴² ŋw⁵⁵lo⁴⁴ŋw⁵⁵vu⁵⁵ zo⁵⁵ku⁵⁵ ma³³-pi⁵⁵-tsɔ⁴⁴-na⁴²/ *-a⁴⁴/-Ø?
3SG.NOM なぜ 子供 NEG-CAUS-食べる-O
「彼はどのようにして子供に食べさせないんだ？」
iii) n⁴² ŋw⁵⁵lo⁴⁴ŋw⁵⁵vu⁵⁵ ki⁵⁵ŋo⁵⁵ŋi⁴⁴ le³³-ŋu³⁵-na⁴²/ *-a⁴⁴/-Ø?
2SG.NOM なぜ チノ語 学ぶ-AUX-O
「君はどのようにしてチノ語を学びたいの？」

ii)では-na⁴²、-a⁴⁴、-Øのいずれも容認されるのに対し、iii)では-na⁴²、-Øのみが容認され、-a⁴⁴は容認されない。

このことは動詞複合形式内における否定辞の存在や、疑問副詞「なぜ」そのものの語構成(ŋw⁵⁵-lo⁴⁴ŋw⁵⁵-vu⁵⁵[どれ-ように cop- ので]「どのようであるので」という節が1語となっている)が関係しているかもしれないが、本質的な解明は今後更なる考察を行わねばならない。

2.4.1 論理的主語が「誰」という疑問代名詞で、かつ名詞述語が文末に置かれる場合

まず、(30) を見てみよう。

- (30) a. *khɔ³³su⁵⁵ t[uaŋ³³=nɔ³⁵-mɤ⁴²-Ø/ *-la⁴²/ *-na⁴²/ *-a⁴⁴?*

誰 轢く=痛む-PAST-Q

「誰が轢かれて痛かったの？」

- b. *çi³⁵ khɔ³³su⁵⁵ lo³⁵-mɤ⁴²-Ø/ *-la⁴²/ *-na⁴²/ *-a⁴⁴?*

ここ 誰 来る-PAST-Q

「誰がここに来たの？」

(30) では音形のある疑問文末助詞はいずれも生起しない²⁴⁾。これらの例をやや詳細に見れば、いずれも論理的主語が「誰」で、文末に名詞述語が置かれている例であることが分かる。2.3.2.1 で見たように、(30) の動詞複合形式末に置かれている過去を表す時制接辞 -mɤ は名詞化の機能があるためである。

それでは論理的主語が「誰」で、文末が動詞述語の場合はどうなるのかという点、-na⁴²が生起しうる²⁵⁾ ことが (31) から分かる。

24) チノ語では特に文末に下降調がある場合、疑問を表示することがありえる。(30) の例も文末において -mɤ が下降調 (42 調) となっているため、声調によって疑問を表していると考えられるかもしれない。

しかし、一方で上述した (22a) や (24) のように、疑問文末助詞の直前要素が下降調 (42 調) であっても、疑問文末助詞 -a⁴⁴ が生起している場合がある。ここでは、下降調といった音韻的な条件ではなく、形式的な基準によって疑問文末助詞が生起しないと考える。

25) これらの例で -Ø が生起することもある。それは疑問語疑問文においては、疑問語の存在のみで基本的に疑問語疑問文であることを表現しえるためであろう。すなわち、疑問文末助詞は疑問語疑問文においては情報的に余剰であるためだと考えられる。しかし、(30) の例で助詞として明示的な疑問表現を積極的にとらない点をここでは強調しておきたい。

Hashimoto (1984) が言うように、アジア大陸の南部では疑問代名詞と不定名詞が同形であることが多い。チノ語もその例に漏れず、疑問代名詞が何の形態的標識を持たずに不定名詞として用いられることがある。

本来、所与の文が疑問文に属するか否かを認定するのは形式的に容易であるとまでは言えない。多くの言語で音韻的標識 (主にイントネーションなど) あるいは形態統語的標識を伴わずに、真偽疑問文を表したりすることが可能である。チノ語も以下のような例で可能である。

- (31) a. *khɔ³³su⁵⁵ ten³⁵ji³⁵ te⁴⁴-kɔ^{44*}-la⁴²/-nɔ^{42/*}-a⁴⁴?*
 誰 テレビ 見る-PROG-Q
 「誰がテレビを見ているの？」
- b. *kao⁵⁵tʃoŋ⁵⁵ khɔ³³su⁵⁵ tu³³-tɔ^{55*}-la⁴²/-nɔ^{42/*}-a⁴⁴?*
 高校 誰 学ぶ-EXP-Q
 「誰が高校で学んだことがあるの？」

(31) の例はいずれも「誰」が主語であり、かつ動詞述語が文末に置かれている例である。いずれも *-na⁴²* が生起しうる。このことから、*-∅* は名詞述語が文末に現れる場合に限定すべきであると分かる。

(30, 31) から、以下のように *-∅* が生起する条件が立てられよう。

■生起条件 F: *-∅* は「誰」を論理的主語とする疑問語疑問文で、かつ名詞述語の直後に生起する。

2.4.2 述語が疑問語である場合—疑問代名詞でない疑問語—

次に述語が主に疑問代名詞ではない疑問語²⁶⁾である場合(32)について見てみよう。

- i) *khɣ³⁵ tʃəu⁵⁵tu⁴⁴-mɔ⁵⁵=e⁴⁴ tsu³³=jɔ⁴⁴?*
 あそこ チョウトゥ (人名) -PL=POSS 家=から
 「(それは)あのチョウトゥの家のことか？」

i) の例では特にイントネーションなどによる音韻的標識も得られなかった。このような場合は基本的にある命題に対して、話し手が何らかの情報を得ながらも聞き手に対して問う事例であると考えられる。

多くの言語で疑問文であることを認定する場合には基本的に「聞き手に対して回答を要求する」という文脈上の条件にのっとっていると考えられる。本稿でもこの立場に立っている。よって、通常疑問代名詞として用いられる語彙が形態的標識を持たずに不定名詞として用いられる場合は「聞き手に対して回答を要求する」条件を満たしていない点で、疑問文と認めない。

本稿ではこのような文脈上の条件によって *-∅* が生起しうる事例は取り扱わず、可能な限り形式的な条件により *-∅* が生起する事例について取り扱っていることに注意されたい。

26) 述語が疑問代名詞である例については(21b)を参照されたい。

- (32) a. $ji^{55}ni^{44} n\theta^{42} ko^{33}=la^{33}-my^{55} \eta a^{33}su^{55} \eta u^{55}=va^{44}-\emptyset / *-la^{42} / *-na^{42} / *-a^{44}?$
 昨日 2SG.NOM 持つ=来る-REL バナナ どこ=PART-Q
 「昨日あなたが持ってきたバナナはどこ？」
- b. $ji^{55}ni^{44} n\theta^{42} ju^{33}-my^{35} \int ou^{33}tci^{33} \eta u^{55}pu^{44}=th\theta^{42}-\emptyset / *-la^{42} / *-na^{42} / *-a^{44}?$
 昨日 2SG.NOM 買う-REL 携帯電話 どのくらい=多い-Q
 「昨日あなたが買った携帯電話はいくら？」

(32) はいずれも述語が $\eta u^{55}va^{44}$ 「どこ」、や $\eta u^{55}pu^{44}th\theta^{42}$ 「いくら」など、疑問代名詞ではない疑問語である。このような場合、疑問文末助詞が生起しない。

これらの例において、疑問文末助詞の直前の要素はいずれもコピュラの前に来ることができるため、名詞述語であると考えられる。よって、生起条件 Eのごとく、直接 $-a^{44}$ を後接させることができると通常予想される。しかし、実際には (32) の場合は不可能であると話者から判断が下された。

このことから、以下のような生起条件を立てよう。

■生起条件 G : \emptyset は (疑問代名詞ではない) 疑問語の直後に生起する。

一方、このタイプの疑問語は直後にコピュラを置くことができる。コピュラはチノ語では動詞であるため、(33)のごとく、動詞述語の場合の疑問文末助詞の生起条件 D が適用される。

- (33) a. $ji^{55}ni^{44} n\theta^{42} ko^{33}=la^{33}-my^{55} \eta a^{33}su^{55} \eta u^{55}=va^{44} \eta u^{55}-na^{42}?$
 昨日 2SG.NOM 持つ=来る-REL バナナ どこ=PART COP-Q
 「昨日あなたが持ってきたバナナはどこ？」
- b. $ji^{55}ni^{44} n\theta^{42} ju^{33}-my^{35} \int ou^{33}tci^{33} \eta u^{55}pu^{44}-th\theta^{42} \eta u^{55}-na^{42}?$
 昨日 2SG.NOM 買う-REL 携帯電話 どのくらい=多い COP-Q
 「昨日あなたが買った携帯電話はいくら？」

以上、疑問文末助詞が形式的条件を理由に生起しないという事例を記述した。しかし、多くのデータを含めると、 $-a^{44}$ を許す例とゆれを示すことも多い。これらは将来、一般的な疑問語疑問文で名詞述語のパターン (すなわち、生起条

件 E) と合流する可能性がある²⁷⁾.

2.5 形式的生起条件のまとめ

以上、疑問文末助詞が形式的に生起しうる条件を見てきた。生起条件 A から G までをまとめると、以下の表 1 のようになる。

左から、「疑問の種類」、「先行する述語の動詞性」、「生起しうる疑問文末助詞」、「関係する生起条件」を示す。「先行する述語の動詞性」においては、[+V] で動詞述語を、[-V] で名詞述語を、[±V] で動詞述語および名詞述語の両方を表す。

表1 先行する述語の動詞性と疑問文末助詞

疑問の種類	述語の動詞性	疑問文末助詞	生起条件
真偽疑問	[±V]	-la ⁴²	A
	[+V]	-na ⁴²	B, C
疑問語疑問	[+V]	-na ⁴²	D
	[-V]	-a ⁴⁴	E
	([-V])	-∅	F, G

ただし、-∅は「誰」を論理的主語とする名詞述語の直後」ならびに「(疑問代名詞ではない) 疑問語の直後」という条件が付け加わる。更に、-∅は-a⁴⁴とも多くのデータで交替しうる。

27) 例えば、以下のような例も散見される。

- i) kh³³su⁵⁵ n³⁵ ɕa⁵⁵lo⁴⁴ko³³-mjo⁴², zo⁵⁵-vi⁴⁴-mv⁴²-a⁴⁴?
 誰 2SG.OBL 荷物 もつ-して 歩く-CAUS-PAST-O
 「誰があなたに荷物を持って歩かせたの？」
- ii) ni⁵⁵ju⁴⁴ tso³³ɲu⁵⁵-pu⁴⁴-xy⁴⁴ -a⁴⁴?
 2SG.NOM 家 どれ-くらい-大きい-O
 「あなたのお家はどれくらい大きいの？」

i) は「誰」を論理的主語とする疑問語疑問文で、名詞述語の直後に疑問文末助詞が置かれている。ii) は ɲu⁵⁵pu⁴⁴-「どれくらい」という疑問代名詞ではない疑問語が文末に置かれた疑問語疑問文である。いずれも生起条件 F および G により、疑問文末助詞が生起しないという予測が得られるはずであるが、-a⁴⁴が生起している。このようにこれらはすでに「疑問語疑問文で名詞述語の直後に-a⁴⁴が生起しうる」という生起条件 E に合流し始めていることを示す例といえよう。

3.2 論理的な主語解釈における差異

更に、 $-la^{42}/-na^{42}$ の両方が真偽疑問文でともに形式的に文法的になる事例で論理的な主語の解釈における差異が関連することがある。それは主に進行相のときに見られる。

(35) の例を見てみよう。

- (35) a. $a^{55}m\alpha^{44} \quad ji^{33}t[ho^{55} \quad tshi^{55}-k\alpha^{44}-la^{42}/-na^{42}?$
 母 水 洗う-PROG-Q
 「お母さんは水浴びしているの？」 (=19a)
- b. $ja\alpha^{33}li^{33} \quad ja^{33}pja^{33} \quad ja^{33}-k\alpha^{55}-la^{42}/-na^{42}?$
 李さん 箒 掃く-PROG-Q
 「李さんは箒を掃いているの？」

これらの例はいずれも $-la^{42}/-na^{42}$ の両方が可能である。しかし、どちらの疑問文末助詞が生起するかによって、その論理的な主語の解釈に相違点が出る。すなわち、(35a) で $-la^{42}$ を使えば、「お母さん」は（今ここにはいない）「話し手でも聞き手でもない第三者」の解釈であるが、 $-na^{42}$ を使えば、「お母さん」は（今日の前にいる）「聞き手」を指す。これは (35b) でも同様であり、 $-la^{42}$ を使えば、「李さん」は（今ここにはいない）「話し手でも聞き手でもない第三者」の解釈で

くないと考えられる。すなわち、真偽疑問文における $-la^{42}/-na^{42}$ の生み出すニュアンスの差は非常に微妙であると考えられる。例えば、以下の例では $-la^{42}/-na^{42}$ がともに用いられる。しかし、話者にはその意味はほとんど同じだと感じられるようだ。

- i) 問 : $khv^{42} \quad mi^{55}j\alpha^{55}\eta^{44} \quad le^{55}-la^{42}/-na^{42}?$
 3SG.NOM 明日 行く-Q
 「彼/彼女は明日行くの？」
 答え A : $le^{55}-a^{55} \quad mi^{55}j\alpha^{55}\eta^{44}$. 「行く。明日ね。」
 行く-PART 明日
 $/m\alpha^{55}-le^{44}-a^{44} \quad j\alpha^{33}ph\alpha^{55}\eta^{44}$. 「行かない。あさってだ。」
 NEG-行く-PART あさって
 答え B : $\eta u^{33}-a^{44} \quad le^{55}-a^{55}$. 「そうさ。行くよ。」
 COP-PART 行く-PART
 $/m\alpha^{33}-\eta u^{55}-a^{44} \quad m\alpha^{55}-le^{44}-a^{44}$. 「いや。行かない。」
 NEG-COP-PART NEG-行く-PART

これまでの議論では $-la^{42}/-na^{42}$ の違いにより、答え A もしくは答え B のいずれかが選択されると考えられる。しかし、i) の問のような場合、 $-la^{42}/-na^{42}$ のいかに関わらず、答え A ないし答え B のいずれも用いることができるようだ。

あるが、-na⁴²を使えば、「李さん」は（今日の前にいる）「聞き手」を指す。これらをまとめれば、-na⁴²を用いた場合、「お母さん」、「李さん」が2人称的（呼格的）に用いられていると言えるだろう。

特に進行相の場合の -na⁴² はチノ語話者の意見を整理すると、話し手が動作行為の行われている現場にいることを表しているようだ。

3.3 疑問の焦点との関連

3.1, 3.2 では真偽疑問文で -la⁴²/ -na⁴² の両方が用いられる事例を見、その意味の相違点を記述した。ここではこの2つの事例に共通する点を見出し、-la⁴²/ -na⁴² それぞれが疑問の焦点といかなる関係を持っているかを考察したい。

まず、3.1 の (34) で見たように、-la⁴²/ -na⁴² ではその問われる内容が異なる。これはそれぞれがどの部分を疑問の焦点として捉えているかという問題と関わっている。-la⁴² は「聞き手が薪を必要としているか否か」という、いわば文全体の内容を疑問の焦点として捉えている。一方で、-na⁴² は -la⁴² で問われる内容をすでに前提として捉え、更に「必要としている薪の長短」を問題としている。つまり、-na⁴² は文内容の一部に疑問の焦点を当てていると言えよう。

それでは、3.2 の (35) はどうだろうか。この場合も基本的に疑問の焦点に関連していると考えられる。(35a) を例に挙げて考えてみよう。-la⁴² は「お母さんが水浴びをしている」という命題自体の真偽が問われる疑問文である。そのため、文全体が疑問の焦点として見なされる。一方、-na⁴² は「水浴びしているか否か」という動作・行為に対してその真偽が問われる疑問文で、「お母さん」の部分は話し手の目の前にいる聞き手で、いわば前提となっている。すなわち、文の一部のみに（この場合、動作・行為に対して）焦点が当てられている。それゆえに「お母さん」という語彙そのものは呼びかけ的に用いられているように見えるわけである。

このことは -na⁴² が形式的に疑問語疑問文に生起しうることをも裏付ける。なぜなら、疑問語疑問文は基本的に文中に現れる疑問語のみに焦点を当てた疑問文だからである²⁹⁾。また、真偽疑問文において完了助詞 -a の直後で -la⁴² ではなく、

29) それではなぜ疑問語疑問文で名詞述語の直後に -a⁴⁴ が現れるのかという問題がまだ残

-na⁴²が生起するのも、これと関係があるだろう。つまり、チノ語において完了助詞が動作・行為の完了自体に焦点を当てる機能をもつと考えれば、真偽疑問文で -na⁴²が生起するのは意味的な条件が強く関わっているからであると見ることができる。

更に、以上のことは選択疑問文での疑問文末助詞の生起状況にも関連する。以下で選択疑問文の例を見てみよう。

- (36) a. nɔ⁴² le⁵⁵-la⁴²/-na⁴², ma⁵⁵-le⁵⁵-la⁴²/-na⁴²?
 2SG.NOM 行く-Q NEG-行く-Q
 「あなたは行くの、それとも行かないの？」
- b. nɔ⁴² le⁵⁵-la⁴²/-na⁴², khv⁴² le⁵⁵-la⁴²/-na⁴²?
 2SG.NOM 行く-Q 3SG.NOM 行く-Q
 「あなたが行くの、それとも彼／彼女が行くの？」
- c. pu⁵⁵na⁴⁴ʃɔ⁵⁵=jɔ⁴⁴ khœ^{42*}-la⁴²/-na⁴², va⁵⁵ʃɔ⁴⁴=jɔ⁴⁴ khœ^{42*}-la⁴²/-na⁴²?
 牛肉=から 作る-Q 豚肉=から 作る-Q
 「(今日の料理は) 牛肉から作るの、それとも豚肉から作るの？」

(36) はいずれも選択疑問文である³⁰⁾。チノ語では通常「それとも」にあたる

る。これに対しては基本的には以下のように考えられる。

上述したように、-na⁴²は動詞述語の直後にしか生起しえない。そのため、疑問語疑問文で名詞述語の直後には -na⁴²は用いられない。名詞そのものは動詞とは異なり、元來述語になりにくい性質のものであると考えられる。そこで名詞述語が疑問語疑問文に現れる場合には、文を安定的に終止させるための助詞として -a⁴⁴を生起せしめるのであろうと考えられる。つまりは、-a⁴⁴そのものには -la⁴²や -na⁴²の担うような疑問の焦点を参照する意味・機能はなく、単に文を終止させる機能のみが存在すると考えられる。

30) (36a) は漢語で用いられる動詞の肯定形と否定形の並列による真偽疑問文を連想させる。

- i) nǐ chī bu chī fàn?
 2SG 食べる NEG 食べる ご飯
 「あなたはご飯を食べますか？」

i) では ‘chī’ 「食べる」という肯定形と ‘bu chī’ 「食べない」という否定形が並列されて、真偽疑問文を形成しているように見える。中国語学ではこれを一般に「反復疑問文」と呼んでいるが、これが真偽疑問文から派生したものであるのか、あるいは独立した文のタイプとして確立すべきかといった問題には長年の論争があるようだ。興水(2000: 50)によると、i) のような反復疑問文のほうが、本稿冒頭にあげた (3a) のような真偽疑問文(興水(2000)では「当否疑問文」という用語を用いている)よりも「真の問いかけ」を行っているニュアンスがあるという。劉(1983)によれば、(3a) のよ

ような接続語は用いず³¹⁾、選択肢となる句（あるいは節）を並列することで選択疑問文を形成する。

選択疑問文では基本的に疑問語は現れない。それゆえに、形式的には疑問語疑問文よりも真偽疑問文により近いと言える。それゆえに、(36a, b) では $-la^{42}$ の生起が可能である。しかし、(36c) では不可能である。

一方で、(36) のいずれの例でも $-na^{42}$ が生起できる。これはどういうことであろうか。

選択疑問文では話し手が聞き手に対して解答の候補を提示する方法を取っている。このとき、疑問文全体が表す命題の真偽よりもむしろ、疑問文の一部（つまり、解答の候補）に焦点を当てていると考えられよう。そのため、選択疑問文では(36)の各例のように $-na^{42}$ が生起しうると考えられる。

また(36c)では(36a, b)とは異なり、 $-na^{42}$ のみが生起可能で、 $-la^{42}$ が生起不可能であるのは以下の理由からであろう。すなわち、(36a, b)では見方によっては、2つの真偽疑問文の並列と見ることもできるが、(36c)では1つの選択疑問文の中で後置詞 $=jo^{44}$ を含む斜格名詞句が選択肢として置かれ、その斜格名詞句に焦点を当てていると通常考えられるからである。話し手の提示する解答の候補が斜格名詞句であることにより、2つの真偽疑問文の並列ではなく、1つの選

うな真偽疑問文は語気がゆるく、反復疑問文は追求や切迫のニュアンスが含まれるという。

東・東南アジア諸語の中には漢語のように動詞の肯定形と否定形を並べた真偽疑問文を形成する言語が多い。漢語以外の言語では真偽疑問文がこのタイプしか許さないこともあるため、漢語のような真偽疑問文と反復疑問文のニュアンスの差は文脈でしか表しえないと考えられる。戴・傅(2000)は「反復疑問文はチベット・ビルマ諸語ではいくつかの言語にしか見られない。(中略)チベット・ビルマ諸語においては反復疑問文と選択疑問文の関係は密接で、その境界が分けられない言語もある」(日本語訳は筆者による)と述べている。一方、戴(2003[1991]:450)によれば、チノ語と系統的に近いロロ系諸語のなかでもロロ語をはじめ、リス語、ハニ語、ラフ語、ナシ語、ヌ語ではこのタイプの真偽疑問文が可能であると記述している。更に戴(2003[1991]:450)では、チノ語もこのタイプの真偽疑問文が可能であると述べている。しかし、筆者の調査ではii)のごとく不可能であると話者に判断された。

- ii) * $n\alpha^{42}$ le^{55} ma^{55} $-le^{55}$?
 2SG.NOM 行く NEG -行く
 「あなたは行きますか?」

チノ語では(36a)のように必ず肯定形・否定形の直後に助詞を置かねばならない。31) 蓋(1986)では(12)のように ku^5 $kh\alpha^{42}$ vu^{42} $l\alpha^{33}$ 「それとも」が選択疑問文で用いられている。しかし、筆者の調査で得たデータではこのような語は用いられなかった。

択疑問文としての解釈が優先されるということである。

以上のように考えれば、 $-la^{42}$ と $-na^{42}$ の生起条件は疑問の焦点に対する解釈にもっぱら依拠しており、形式的な生起条件は不要なのではないかとの疑問が生じるかもしれない。しかし、表1で見たとおり、 $-na^{42}$ は動詞述語にしか後接できない。よって、たとえ選択疑問文でも、(36b) とほぼ同じ意味である (37) では $-la^{42}$ のみが生起可能である。

- (37) na^{42} $le^{55}-me^{55}-la^{42}/ *-na^{42}$, khv^{42} $le^{55}-me^{55}-la^{42}/ *-na^{42}?$
 2SG.NOM 行く -FUT-O 3SG.NOM 行く -FUT-O
 「あなたが行くの、それとも彼／彼女が行くのか？」

(37) では疑問文末助詞が未来接辞 $-me$ の直後に生起している。2.3.2.2 で見たように、未来接辞 $-me$ は名詞化の機能を持っている。よって、(37) では $-na^{42}$ は生起できず、 $-la^{42}$ のみが生起する。 $-a^{44}$ が通常ここで問題にならないのは、選択疑問文内に疑問語が現れないためである。よって、以上から各疑問文末助詞が生起する条件には意味・機能的条件のみならず、形式的生起条件も関与することが明らかになった³²⁾。

32) 査読者の1人から、もし存在すれば「述語でない疑問名詞を焦点とする名詞述語の疑問文の例」を挙げるべきだ、と指摘された。1例としては次のものが挙げられよう。

- i) $kh\textcircled{33}su^{55} a^{55}pru^{44} *-la^{42}/ *-na^{42}/ -a^{44}/ -\emptyset?$
 誰 ばかもの-O
 「誰がばかものなのか？」

この例では文の一部が焦点となっているため、 $-la^{42}$ ではなく、 $-na^{42}$ が予測される。しかし、実際には $-na^{42}$ も不可となり、 $-a^{44}$ を用いると文法的となる。これはどのように解釈すべきであろうか。

この例の述語部分は名詞性を帯びているため、形式的な条件により文末に置くことができず、それゆえに、文の一部が焦点となる場合であっても、 $-na^{42}$ ではなく、 $-a^{44}$ でなければならない。ただし、この場合は疑問語がすでに文中に現れ、疑問語疑問文であることは明確であるため、文末が $-\emptyset$ であってもよい。

またこれと関連して、同じ査読者から「過去 $-mv$ 、未来 $-me$ を含む疑問語疑問文以外で、かつ文の一部が焦点となるような疑問文の例」も挙げておくべきだ、と指摘された。この例としては以下の ii), iii) の例が挙げられよう。

- ii) $ja^{55}ni^{44}na^{42}$ $jao^{33}li^{33}$ $mja^{33}-mv^{35}la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 今日 2SG.NOM 李さん 会う-PAST-O
 「今日あなたは李さんに会ったのか？」
 iii) na^{42} $pa^{55}kha^{42}le^{55}-me^{55}-la^{42}/ *-na^{42}/ *-a^{44}?$
 2SG.NOM バカー 行く-FUT-O
 「お前はバカーに行くつもりなのか？」

4. おわりに一通時的視点を添えて一

これまで見てきたように、チノ語の3つの疑問文末助詞 $-la^{42}$ 、 na^{42} および $-a^{44}$ の生起には真偽疑問文／疑問語疑問文・名詞述語／動詞述語といった形式的生起条件と疑問の焦点という意味・機能的条件が相互に関与することが示された。

チノ語にとって、確かに疑問文末助詞の生起において名詞述語／動詞述語の区別や疑問の焦点という意味・機能的条件が関与することは重要である。しかし、それは決してチノ語だけに特徴的なこととまでは言えないかもしれない。広く疑問文末助詞をもつ近隣の東・東南アジア諸語にこの区別が関わっている可能性もある³³⁾。今後多くの東・東南アジア諸語の疑問文末助詞の生起条件をこの点から再検討する必要があるだろう。

最後にチノ語の疑問文末助詞 $-la^{42}$ および $-na^{42}$ が迎った歴史的推移について若干言及し、本稿を閉じたい。

チノ語の助詞 $-la^{42}$ 、 $-na^{42}$ は同一系統に属するロロ・ビルマ諸語の疑問を表す助詞と比較すると、祖語からの由来を推測させる。以下に、関連する同系諸語の疑問文末助詞を並べる。なお、ビス語は徐 (1998) から、アチャン語は戴・崔 (1985) から、サンコン語は李 (2002) から引用する。

表2を見ると、真偽疑問／疑問語疑問という使い分けが祖語の段階でなされ、かつそのロロ・ビルマ祖形が、真偽疑問で * la 、疑問語疑問で * $n(y)$ - のごとく再

実際には、チノ語では時制標識が現れた ii) や iii) のような例文では厳密には文の焦点範囲があいまいであると言わざるをえない。つまり、ii) の例は「今日あなたは李さんに会った」までを焦点とする例だと考えることもできれば、「李さん」の部分だけを焦点とする、すなわち「あなたが会ったのは李さんなのかどうか」を問うている例だと考えることもできる。同様に、iii) の例は「お前はバカーに行くつもりだ」までを焦点とする例だと考えることもできれば、「バカー」の部分だけを焦点とする、言い換えれば「行くつもりなのはバカーなのか、それとも他のどこかなのか」を問うている例だと考えることも可能である。

そのいずれの場合であっても、疑問文末助詞としては $-la^{42}$ のみが可能である。本注内 i) の例と同様、チノ語では $-na^{42}$ は名詞述語に後接できないため、たとえ文の一部を焦点とする疑問文であっても、名詞述語を形成する機能をもつ過去や未来の接辞の直後に $-na^{42}$ を置くことは不可能だからである。よって ii), iii) では真偽疑問文で、かつ名詞述語にも後接可能な $-la^{42}$ が形式的条件により生起しているものと考えられる。

以上の事実からも意味・機能的条件と形式的条件はともに関与することが見てとれる。

33) 例えば、名詞述語／動詞述語の区別は、チベット・ビルマ語派のロロ語やアチャン語でも関与している可能性がある。更に疑問の焦点は広東語の疑問文末助詞の生起条件に関与している可能性もある。

構できると考えられる³⁴⁾。このように考えると、チノ語の *-la*⁴²⁾、*-na*⁴²⁾ も元来はそれぞれ真偽疑問、疑問語疑問を表していたのではないだろうか。それが歴史的推移に応じて、*-na*⁴²⁾ がチノ語独自の変化で再解釈され、形式的には真偽疑問・疑問語疑問の両方に用いられるようになったと考えられる。

表2 ロロ・ビルマ諸語の疑問文末助詞

疑問の種類	ビス語	アチャン語	サンコン語	ビルマ文語	ビルマ口語
真偽疑問	<i>la</i> ⁴²⁾	<i>la</i> ³¹⁾	<i>le</i> ³³⁾	(<i>lo</i>)	<i>là</i>
疑問語疑問	<i>ni</i> ^{55y, 31)}	<i>ne</i> ³¹⁾	<i>wa</i> ⁵⁵⁾	<i>nañ:</i>	(<i>lè</i>)

疑問文末助詞の研究は疑問文という文のタイプの認定に始まり、広くモダリティ—般の問題や文法構造の問題に関係がある。チノ語を含む東・東南アジア諸語において、疑問を主軸に展開する様々な問題群は今後より一層の発展的研究が必要とされる。

34) もちろん、サンコン語の疑問語疑問文の助詞については除外して考えた方がよいだろう。なお表2で掲げたビルマ文語形は綴字転写で、ビルマ口語形は音韻転写であることに注意されたい。

Matisoff (2003: 488) は真偽疑問の文末助詞が、ラフ語で *là*、ビルマ口語で *là*、疑問語疑問の文末助詞が、ラフ語で *le*、ビルマ口語で *lè* であることを重視してロロ・ビルマ祖形として **la*²⁾ (真偽疑問)、**lay*^{2,5)} (疑問語疑問) を再構した。更に Matisoff (2003: 488) はロロ・ビルマ祖形よりも古い段階のチベット・ビルマ祖形として、真偽疑問で **la*、疑問語疑問で **lay* を再構している。疑問語疑問を表す助詞の祖形は **la-y* と分析でき、それは真偽疑問の **la* に対し、*-y* という接尾辞が付いたものであるとの解釈を示しているように見える。

しかし、筆者はこの解釈に若干の疑問を持つ。なぜならビルマ文語には表2にも示したように *nañ* の形式も存在するからである。表2に挙げたいくつかのロロ・ビルマ諸語に関するかぎり、ビルマ文語の対応する形式としては *lè* ではなく *nañ* を用いるべきだと考える。

(また査読者の1人に、ビルマ文語の真偽疑問で用いられる形式 *lo* も *la-w* と分析できるため、ロロ・ビルマ祖形 **la* に繋がる可能性がある、と指摘された。筆者もこれに同意する。)

参 照 文 献

- 戴慶廈 (Dài Qìngxia) (2003 [1991]) 「彝語支」馬學良 (主編) 『漢藏語概論』 409-486. 北京: 民族出版社.
- 戴慶廈 (Dài Qìngxia) · 崔志超 (Cuī Zhìchāo) (1985) 『阿昌語簡誌』北京: 民族出版社.
- 戴慶廈 (Dài Qìngxia) · 傅愛蘭 (Fù Àilán) (2000) 「藏緬語的是非疑問句」『中國語文』5: 390-398.
- 蓋興之 (Gài Xīngzhī) (1986) 『基諾語簡誌』北京: 民族出版社.
- 蓋興之 (Gài Xīngzhī) (1987) 「基諾語句子的語氣」『民族語文』2: 29-36.
- 興水優 (2000) 「反復疑問文をめぐる」『中国語学』247: 40-55.
- 劉月華 (Liú Yuèhuá) (1983) 『實用現代漢語語法』北京: 外語教學與研究出版社.
- Hashimoto, Mantaro J. (1984) Question and its presupposition in Chinese. In: The Chinese Language Society of Hongkong (ed.) *Wang Li Memorial Volumes (English Volume)*, 148-177. Hongkong: Joint Publishing Co. (HK)
- 林範彦 (2006) 「チノ語悠楽方言」中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』243-270. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 林 範彦 (印刷中) 「チノ語 -mv の「多機能性」—漢藏語と対照しながら—」『京都大学言語学研究』第 25 号.
- 李永燧 (Lǐ Yǒngsuì) (2002) 『桑孔語研究』北京: 中央民族大学出版社.
- 呂淑湘 (Lǚ Shūxiāng) 主編 (1980) 『現代漢語八百詞』北京: 商務印書館.
- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- Okell, John (1969) *A reference grammar of colloquial Burmese*. 2 volumes. London: Oxford University Press.
- Sadock, Jerold M. and Zwicky, Arnold M. (1985) Speech act distinctions in syntax. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description 1: Clause structure*, 155-196. Cambridge: Cambridge University Press.

徐世璇 (Xú Shìxuán) (1998) 『畢蘇語研究』 上海：上海遠東出版社。

《要 旨》

本稿は中国雲南省で話されるチノ語悠楽方言（チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支）の疑問文末に生起する3つの助詞 $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$ の振る舞いについて論じた。多くのアジア諸語では真偽疑問文／疑問語疑問文の区別が疑問文末の助詞の振る舞いに関与する。しかし、チノ語では上記の区別に加えて、名詞述語文／動詞述語文といった形式的条件と焦点位置などの意味的条件が助詞の振る舞いに関与する。具体的には以下のとおりである。形式的条件としては $-la^{42}$ は真偽疑問文末に、 $-na^{42}$ は動詞述語文である真偽疑問文末と疑問語疑問文末に、 $-a^{44}$ は名詞述語文の疑問語疑問文末に生起しうる。また意味的条件としては主に $-la^{42}$ は文全体が焦点であるときに生起するのに対し、 $-na^{42}$ は文の一部が焦点であるときに生起する。

Abstract**Three Interrogative Particles at Sentence-Final Position in Jino**

Norihiro HAYASHI

(Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science)

Jino is spoken by the Jino minority living in Xishuangbanna Autonomous State, Yunnan Province, China. It belongs to the Lolo-Burmese branch of the Tibeto-Burman family. This paper describes the alternations of the Jino interrogative particles *-la*⁴², *-na*⁴² and *-a*⁴⁴. Previous works (e.g., Gai 1986) mention no such criteria. The analysis of my collected data concludes that the formal criteria and the semantic criteria interact to determine the occurrence of particles in interrogative sentences. The formal criteria for the occurrence of the particles follow:

- (i) *-la*⁴² occurs in response to Yes-No questions.
- (ii) *-na*⁴² can follow the verbal predicate of Yes-No questions and Wh-questions.
- (iii) *-a*⁴⁴ can follow the nominal predicate of Wh-questions.

However, \emptyset can follow the nominal predicate of Wh-questions whose subject is *kh*³³ *su*⁵⁵ “who,” and can directly follow wh- words that are not interrogative pronouns. Under these two conditions, *-a*⁴⁴ basically cannot appear, though there are some exceptions. Furthermore, the following two semantic criteria constrain the occurrence of *-la*⁴² and *-na*⁴² in the Yes-No questions:

- (iv) If an inquiry concerning the entire sentence is being made, *-la*⁴² may occur.
- (v) If an inquiry concerning only part of the sentence is being made, *-na*⁴² may occur.

(受領日 2006年9月4日 最終原稿受理日 2007年1月13日)